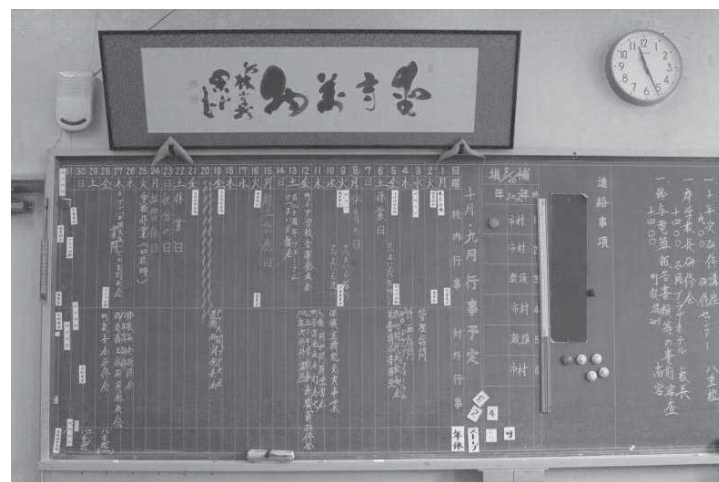


先輩・同僚・地域等との連携



私の夢と希望

幼稚園教諭として働くことが私の夢でした。夢の実現から約四十年、幼児の教育者として楽しく仕事を続けています。このように楽しく仕事ができるのも、現在に至るまで勤めることができた園の職場環境のおかげです。特に人的環境としての諸先輩、同僚、後輩との出会いです。

新任の頃、先輩より「まずは教師である前に一人の社会人として自覚をもち、自己研鑽に努めよう。私たちは家族より一緒に過ごす時間が長いものだから楽しく仕事をしよう。そのためには、職員同士、互いに理解し合い、気持ちを一つにして、園の教育目標を達成していこう」また、「教育は人なり、というように、幼児期は教師の人間性が強く影響を与えることを忘れてはいけない」と、社会人としての心構えや幼児教育者としての基本を説かれました。更に、「園の教育目標である、『健康な子ども・情操豊かな子ども・考える子ども』を育むためには、教諭自らが心身ともに健康で情操豊かな、考えることができるそういう人間であり、子どもたちは、毎日の保育の中から教わるのではなく、そういう先生自身を感じとっていくものである」。そのためには、「教師自身が積極的に周囲の環境に興味や関心を持ち、想像力や思考力を発揮し意欲的に生きることである。このようであれば幼児たちは先生に魅力を感じ、多くのことを感じとってくれるのである」。このような魅力溢れる教師を目指そうと、先輩は休日を返上して、新緑や紅葉の美しい山野にハイキングやキャンプ、夏には富士山や上高地、尾瀬方面の登山、秋にはテニス、バレーボールなどの球技、冬はスキーと温泉。伝統文化に親しもうと、歌舞伎、文楽、能。美術、音

楽鑑賞など。「参加可能なら都合をつけ皆で一緒に楽しもう」「少し気を使うかもしれないけれど、いろいろな事を経験してみよう」と、様々な企画に誘って下さいました。実際のところ、活動によつては「できるだろうか?」と辛く苦しいこともありましたが、先輩からの温かい励ましや、同僚の明るい性格に助けられ、不得意なことにも「まずは挑戦!」と意欲的な気持ちになりました。そしてこの意欲的ということが、幼児の教育者として大切なことを先輩の姿から学びました。人間味溢れる職場で仕事を続けてきましたが、いつの間にか導く立場となり、職員に向け、「互いに理解し合い、意欲を持って、楽しく仕事をしよう」と、先輩が記してくれた道標を頼りに、人的環境のすばらしい職場の雰囲気を守り維持していこうと孤軍奮闘の毎日です。

今年も恒例となっている「夏の富士登山」に、中堅職員の引率で若手七名が参加し、全員が登頂できたと報告がありました。富士登山は苦しいものです。普段はすぐく元気でも頭痛や吐き気に悩まされる人、「もう登れない」と口に出す人、辛くてもじつと無言で耐える人、今回も様々なドラマがあったようです。ですが、一つの目的に向かい、行動を共にし、励ましたり、励まされたりすることで仲間との一体感が生まれ、感動を共有することで、豊かな感性が育まれるのだと思います。教師にこのような経験や体験が多ければ多い程、幼児の感じる心に響くのだと思います。初登頂の職員は、「先輩や仲間へ感謝です。一人では登れませんでした」や「この感動を子どもたちに話したい」など、職場の期待を十分感じ取ってくれたようです。素敵な後輩たちです。

「総合的な学習の時間」で生かす『みらい創造科』

平成二十二年度から三年間文部科学省の指定を受けて、小学校一年生から中学校三年生までの九年間の学習プログラムで構成した新教科『みらい創造科』を立ち上げ、その研究開発に取り組みました。

この『みらい創造科』は、「総合的な学習の時間」においての「探究的な学習」と同様の学習過程で進めるという形態をとりますが、それが数ヶ月或いは、一年間で完結するというものではありません。前学年での学習をベースとしてその学びが今年度の学習に活用され、更に次学年の学習に繋がっていくという、義務教育九年間を貫いて幾重にも重なるスパイラル構造となっています。また、その内容は、持続可能な循環型社会の構築に必要な課題の発見やその解決に積極的に取り組み、創造力や意欲に満ちた主体性溢れる人間を育成するための『育てたい三つの能力』①様々な視点から事象をみていく複眼的な観察力及び思考力、②緻密さを重視した技能的能力、③課題を発見し、解決に向けて行動する能力、を育むというねらいに沿って評価を行っていくというものです。

私が赴任する前の年には既に決まっていたこの研究開発指定校ですが、その実践に伴う諸々の不安(例えば、小中一貫教科の指導体制についての連携、新教科の実施に伴う時数増による他教科への影響、三年間で切られる予算と教員の加配、そして何より、新教科を学んできた小学生の入学後の継続指導、等々)をどう解決するかという難題に向けて実践してきた幾つかの愚策を紹介したいと思います。

一 小・中連携による研究実践の円滑化を図るための推進役となる教員の抜擢(各校の

教務主任)及び、連絡・調整日の定期的な開催

二 実践過程における成果を可視化し共有することによる教職員のモチベーションの維持と更なる高揚

三 指定校終了後における、指導内容の精選と他教科・領域へのスムーズな転換及び、位置付け(「総合的な学習の時間」への組み入れ等)

四 精選した内容の継続的な指導に伴う予算付け

五 保護者への情報提供(「三つの能力」と「学力」の相関性)を通じた理解・支援・支持の継続と増大

等々に関して、教頭・教務主任・二つの小学校の校長との調整を密に図り推進しました。

現在、本校では「五常タイム」(総合的な学習の時間)の目標を踏まえ、①体験活動・言語活動を重視した課題解決学習を通して、よりよく問題を解決する能力や資質を育成する、②『みらい創造科』の学習内容を通して、学び方やものの考え方を身に付け、自己の生き方を考えさせる、という学習が継続されているところですが、「前例のない」そして「教員生活で二度と巡り会ふことのない」であろう『研究開発指定校』三年間の苦労は、確実に「総合的な学習の時間」の年計の中に、そして研究に取り組んだ教職員一人一人の中に財産として残っています。

『流した汗は裏切らない』実感です。

とちぎ未来アシストネットの立ち上げ(地域に根ざした学校経営)

平成二十二年度に新任校長として栃木市立吹上中学校に赴任した。足かけ十二年間に渡った行政生活からようやく抜け出し、久しぶりの学校の空気に震える思いで校門をくぐったことを思い出す。赴任に当たり、栃木市教育委員会教育長より宿題が一つ出されていた。文部科学省で平成二十年度より始まった「学校支援地域本部事業」の栃木市バージョンを考え、吹上中学区で立ち上げることだった。

赴任してまもなく学校現場の大変さ、多忙さが身にしみて分かるとともに、浦島太郎状態だった自分自身があつという間に、学校の一教員としての考え方に戻ってしまったことに気がついた。十二年間生涯学習行政に邁進し、学校教育と社会教育との協働の重要性を十二分に理解していたつもりが、学校教育現場に戻ったらすぐに学校教育の敷居の高さを感じなくなっている自分が情けなくなつたことを思い出す。

そこで宿題だった「吹上地区学校支援地域本部事業」の立ち上げに着手した。吹上地区は吹上小学校と千塚小学校の二校と吹上中学校の計三校の学区編成となっている。昔から、学校教育に協力的な地域で、地域住民による安心安全パトロールの実施やPTA活動の環境で「おやじの会」が結成され、児童生徒のために様々な活動を展開している。

「吹上地区学校支援地域本部事業」の概要は次の通りである。

一 事業の趣旨

吹上地区全体で吹上中学校・吹上小学校・千塚小学校の教育を支援する体制づくりを推進することにより、吹上地区学校教育の充実を図る。地域住民が学校現場に協力すること

により、地域の子どもたちとの交流する機会の増加、自己の学習成果の発表する機会の拡充となり、吹上地区の教育力の活性化を図る。

二 事業の内容

(一) 吹上地区学校支援地域本部事業推進委員会の設置(以下推進委員会と称す)

① 推進委員会を設置し事業の運営及び評価等を行う。

- ・ 三校の教職員(校長、社会教育主事有資格者及び生涯学習担当)、吹上公民館関係職員及び三校のPTA関係者を推進委員会メンバーとする。

② 推進委員会を六月・八月・十二月・三月の四回開催する。

(二) 吹上地区学校支援地域本部事業の運営

① 吹上地区学校支援地域本部を吹上公民館に置く。

② 県教委主催「学校支援地域本部事業関係者研修」に参加する。

③ 各学校の協力により、地域の人材バンク、支援内容プログラムバンクを作成する。

④ 地域コーディネーター及び学校コーディネーターを設置する。

- ・ 地域コーディネーターは公民館関係職員が担当する。学校コーディネーターは学校長の命により、社会教育主事有資格教職員及び生涯学習担当者が担当する。

この「吹上地区学校支援地域本部事業」が基となり、現在着実に進化しつつある栃木市教育の根本となる「とちぎ未来アシストネット」が誕生したのである。「とちぎ未来アシストネット」は、学校が受け身的に協働するのではなく、将来地域で活躍する児童生徒を育成するため地域活動に積極的に参加するなど、活動は幅を広げている。

栃木市立都賀中学校 鈴木 正 俊

「アントレプレナー」は、あなたのものです。

アントレプレナーとは、直訳すると起業です。でも、私は、連携と訳しています。アントレは、仏語で料理の前菜のことです。これから始まるディナーの前のささやかな仕掛けのことです。「連携」とは、互いの立場を生かしながら、「報・連・相」を手段に新しい仕掛けを業に起こすことです。地域連携は、学校と地域が、あることを「起業」することです。「起業」なくして「連携」はありません。

連携の「携」の旧字のつくり「𢇛」は、「子𢇛」と書くときトトギスのことです。ホトトギスは、ウグイスの巣に卵を産み落とし抱卵させ、育つまで委ねています。「ホツチョンカケタカ」と鳴き、「本当に頼みますよ。」と声をかけているように聞こえます。

教職員は、どんなことをやる場合でも支えてくれる人がいないと何もできないのが現状です。「日々是研修」を胸に、たどる道が違っていても求めることは一致していて、心の時計は動き続け、先輩の先生を追いかけて前進もしています。もし、あなたが立ち止まっても先輩教職員があなたを後ろから押しています。だから、教職員であることに感謝しながら連携をすすめてください。連携とは、顔と顔を付き合わせて会話を楽しみながら、起業のヒントを得て動くことです。

学校には、連携するための状況はたくさんあります。連携への大きなチャンスがあり希望もあります。連携しながら、実行しようとする時に失敗する理由よりも自分を信じ精一杯努力を惜しまないことを覚悟してください。不安なマイナス言葉より、明るい言葉を自分に言い聞かせてほしいです。一人ではつかめない夢を連携でつかんでほしいのです。

個人の夢は、皆の夢でもあることを忘れないで、そして心の片隅に再度やり直せることも留めておいてください。夢の切符は、連携でつかむものです。感謝と情熱を持ち、周囲の人の笑顔をむかえてください。そして笑顔をもう一度見たいと思ったとき、この仕事で自分自身を救えると思います。きっと生徒の心に届く言葉を語っているはずです。走って走り続ける体温を生徒たちに、プレゼントしてください。

また連携をすすめるために、復興（ルネサンス）が必要です。世の中には、スキルだけでは作れないものがあるように連携もスキルだけでは通用しません。世の中には理不尽なこと多いはずです。あなたの当たり前だけを全員に求めても解決しないことが多いはずです。だから復興から選択の幅を広げること、納得できる答えを探すことができます。

例えば、東日本大震災後の物理的な復旧は可能です。それでも元のような生活ができる保証はありません。それより難しいことは、復興です。復興は、人の心の問題です。つまり暮らしのことです。復旧（生活）ができることと復興（暮らし）ができることは違います。この復興に関わるのが、私たちです。目に見える豊かさや目に見えない豊かさの違いが分かっているのが私たちです。北国の人々の春を待ちわびる心を想像できるのも私たちです。連携は一つでなく道もゴールもたくさんあります。自分の心が朗らかになり、立ち止まることがあったとしても、それをかみしめて一步を踏み出します。同じ日にたくさん起こる起き、生まれることと失うことがあります。どちらにも未来があり、支えてくれた人の思いがあるから、今があります。多くの人との連携が単眼でありがちな視点を複眼に変え、双眼鏡にも変えると思います。今、お勤めしている学校はあなたのものです。

足利市立山辺中学校 菊地 廣 光

いつでも どこでも だれもが

「いつでも どこでも だれもが」というフレーズは、生涯学習を多くの人たちに周知する言葉です。

私は、教員生活が十二年目となった昭和六十二年の夏休み、宇都宮大学を主会場とした約四十日間にわたる社会教育主事講習を受講しました。ちょうど二年生の担任や部活動の顧問として忙しい時期でしたが、恩師から学校教育以外の分野について学ぶこともいいという話があり、自分自身の視野を広めることや学び直しの時期と考えました。受講科目は、生涯学習概論や青少年教育、成人教育、まちづくりなどの社会教育特講でしたが、学校教育から離れた分野からの教育へのアプローチは、何れも新鮮なことばかりでありました。また、受講者が、教員ばかりでなく市町村の行政職員、そして、群馬、茨城等からの参加者もあり、職種の違った人たちとの交流も意義有るものでした。因みに、当時の講習会場にはエアコンが設置されておらず、受講者たちは、「忍耐講習」といつておりました。

社会教育主事となり、自然体験活動やボランティア活動など、体験活動を重視した取り組みを進める青少年教育に関する事業に関係いたしました。その中の一つに、県版のモデル事業として、海のない本県の子どもたちに海浜自然の家や北海道の大自然を体験させる事業がありました。二百人の小学四年生から中学二年生を対象に、高校生のサブリーダーと栃木県子供会連合会、ガールスカウト、ボーイスカウトの三団体の指導者を中心となって多様な体験活動を支援するものです。子どもたちは、五泊六日の研修の中で、自然体験や異年齢交流など、確実に社会を生き抜く力を身につけることができました。また、

サブリーダーである高校生たちの活躍も大いに評価できるものでした。学校教育以外からの青少年へのアプローチとして意義有るものであり、私にとっても、社会教育主事としてこの事業に関わることができたことは貴重な経験となりました。

また、生涯学習とは、「いつでも どこでも だれもが」学べることであり、学校教育、家庭教育そして社会教育すべての教育活動が含まれます。平成十八年に改正された教育基本法の第三条には、生涯学習の理念として、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と規定されています。

こうした生涯学習社会の中で求められる学校の役割は、生涯を支える学力の基盤を培うとともに、子どもたちが、自然体験や異年齢交流を身近に積極的に参加できる機会を充実させることです。将来を担う子どもたちが、社会を生き抜く力のある人間として成長するためには、経験や体験が重要です。このため、ボランティア団体、青少年団体、市町社会教育事業について理解を深め、子どもたちへのアドバイスやコーディネートをすることが先生方の重要な役割です。学校教育と社会教育が連携して子どもたちを育てていくことが重要なことと考えます。さらに、先生方一人一人が、教師という立場を離れて、自己実現のための生涯学習や地域社会の中で活動することが非常に大切なことだと考えます。